



獣忍戦隊

ジュウニンジャー

戦隊ヒロインピンチ！
緊急停止エレベーターに
ショタと二人きり



その昔、この世を暗黒の闇に突き落とした“^{ば き ば き いちぞく}刃鬼罵牙一族”という妖魔軍団がいた。

だが、その異形の者たちと戦う“^{じゅうにん}獣忍”と呼ばれる忍者たちが現れ——。刃鬼罵牙一族は、その者たちと共に闇へと消えた。

時は、現代。

再び、この世を我が物にしようと刃鬼罵牙一族が復活してしまった。

だが、しかし——。やはり言うべきか、それを予言していた影の忍者組織があった。

その名は…我らが、獣忍戦隊ジュウニンジャー！

獣忍戦隊ジュウニンジャーは、総勢十人のメンバーで結成された戦隊チームで——。百代目頭首、猿飛佐之助と共に戦う運命を背負い、集められた忍びの戦隊である。

そんな獣忍戦隊の通常勤務——。刃鬼罵牙一族の襲来がない日常でも、獣忍戦隊のベース基地にて三人編成の三交代制で常駐し、世界の平和を守っていた。

今回の物語は、その中の——。常駐勤務を終えて、自宅で過ごしていた獣忍戦隊メンバー、ジュウニンピンクの話である。

彼女の名前は、^{う つくし みよ}宇津串 美弥。

「どんな屈強な敵が現れても決して負けない！立ちはだかる壁は、必ず越えてみせる！」

それが彼女…ジュウニンピンクの決め台詞だった。しかし——。

「すみません！どなたか応答してください！どなたか、いらっしゃいませんか！」

ジュウニンピンクこと宇津串 美弥は、自宅マンションのエレベーターに閉じ

込められていた。

それは、数十分前の事。自宅でのんびり過ごしていた美弥のもとに、獣忍戦隊ベース基地から『刃鬼罵牙一族の多発総攻撃が開始された』との緊急召集を受けた。

それにより、直ちに獣忍戦隊から支給されている制服に身を包んで、自宅マンションの自室がある五十五階からエレベーターに乗り込んだのだが――。

その途中、大きな地震に見舞われ、美弥はエレベーターに閉じ込められていたのだった。

エレベーターに設置されている緊急連絡ボタンを押しながら、この超高層マンションの管理室に繋がっていると思われるマイク部分に、美弥は声を掛け続けていたが、、、先ほどの地震でマイクに異常が発生したのか、一向にそれに応えてくれる返事はなかった。

だが、美弥の呼び掛けを聞いていた者は居た――。それは、美弥よりも先にエレベーターに乗っていた一人の少年だった。その少年は、エレベーターの隅っこでうずくまり、顔を伏せている様子から半泣きになっている事が伺える。

エレベーターの緊急連絡ボタンに救出の目処が立たないと踏んだ美弥は――。少年のもとに、近づいてしゃがみ込んだ。

「ねえ… ボク、お名前は？ おねえさんは、美弥って言うの」

美弥の呼び掛けに、少年は半泣きの顔を上げた。

「ボ、ボク… モブ太…」

「モブ太くんね♪おねえさんが、ついてるから心配いらないからね！」

美弥は“モブ太”と名乗る少年の頭を撫でながら、優しく言った。

「でもお… さっきから誰も助けに来てくれないよ」

「……………」

モブ太の言葉にバツの悪さを感じた美弥は、エレベーター脱出のための次なる作戦を実行しようと決めた。

「ねえ、モブ太くん、獣忍戦隊ジュウニンジャー知ってる？」

「うん！知ってるよ！ボク大好き！！」

ジュウニンジャーと刃鬼罵牙一族の戦いは——。刃鬼罵牙一族の襲撃により、テレビ各局が緊急ニュースとしてライブ中継し、ジュウニンジャーの活躍は世界中の子供たちが応援する憧れの存在になっていた。

「実はね… おねえさんジュウニンピンクなんだぁ～♪」

「え！？ホントに？」

本来、影の忍者組織・獣忍メンバーは、その正体を民間の一般人に伏せていたのだが——。このエレベーター内に閉じ込められている緊急時を対処するため、美弥はその正体を明かしたのだった。

「ホントだよ…見てて♪」

「変身！」

バシュウウウウウウウウウウ！グルルウルウウウウウウウ！！！！

美弥が腕に着けている風車のモチーフをしたブレスレットを回すと——。それは風と共に光を放ち、美弥をジュウニンピンクの姿に変えた。

ピッカァァァァァ……ン！！！！

その姿は、美弥の隠しきれない豊満なバストと、キュッと締まったウエストから出ているヒップラインを露わにさせる形で、ピンクの戦闘スーツがその全身を包み——。美弥の清廉可憐な顔は、猫をモチーフにしたヘルメットで覆われていた。

「どんな屈強な敵が現れても決して負けない！立ちほだかる壁は越えてみせる！ジュウニンピンク！！！」

美弥は、半泣きのモブ太を元気づけようと——。密室のエレベーター内で、全開フルバージョンのポーズを決めた。

「うわぁ♪本物だぁ！！♪」

ジュウニンピンクを目にしたモブ太は心を踊らせながら、ボディーラインが露わになっている戦闘スーツの美弥に抱きついて来た。

「もっ、モブ太くん…！？ちょっと放れてくれるかなぁ…」

モブ太が美弥に抱きつくと——。その顔は、丁度、美弥の胸元の高さで…少年は、美弥の豊満な胸に頬擦りをしていた。

そんなモブ太に、美弥はそれに抵抗を感じながらも、無邪気な子供のやっている事と頭を撫でながら受け入れていた。そして、落ち着きを取り戻したモブ太が

彼女から離れると、美弥はエレベーターの扉の前に立った。

「モブ太くん… 扉開けるから離れててね」

「うん！」

美弥は、緊急連絡ボタンで応答を待っている間、エレベーターの扉が開かないものかと何度か試みたものの、、、忍の鍛錬を受けているとは言え、『変身前の力では、どうにもならない』とした結果——。モブ太に正体を明かし、ジュウニンピンクのパワーでエレベーターの扉を開けて脱出をする方法を実行しようとしたのだった。

そんなジュウニンピンクのスーパーパワーを目の前で見れるとして、モブ太はワクワクした気持ちを体全身で表しながら、美弥の後ろ姿を観ていた。

グダグダガガ……！！！！

「壁かぁ… どうしよう…」

ジュウニンピンクに変身した美弥が力づくで開けたエレベーターの扉の先は——。超高層マンションの階層途中、コンクリートの壁があるだけだった。

『電波障害なのか、仲間への通信も途絶えた状態だし…』

『こうなったらエレベーターの天井、もしくは床を突き破って脱出する？』

『でも… ここがマンションの何階かも分からないし…』

「ましてや… 私一人なら、ともかく…」

美弥が、行き詰まった壁を見つめながら、次なる脱出作戦を思案していると——。後ろから、エレベーターの床を足踏みする音が聞こえて来た。

その足音は、当然、モブ太であったが——。振り返った美弥は、先ほどまで元気だったモブ太が顔を曇らせて股間のあたりを両手で押さえながら、どこかへ走り出したいような足踏みをしているのを目にした。

「どうしたの？モブ太くん！」

美弥は、モブ太の今にも泣き出しそう顔に——。戦隊ヘルメットを外して、視線を合わせるようにひざまずいた。

「おねえさん！ ボク…オシッコお～！！」

「おしっこ！？」

美弥は、この状況を想定しておらず——。モブ太の言葉に、オウム返しをする事しか反応が出来なかった。

「それじゃあ、その隅っこで… いや！ちょっと待って！！」

脳裏に浮かんだ「子供だから」という理由で、モブ太にそれを言ったものの、、、即座に、この先の状況を考えた美弥は——。ズボンとパンツを一緒に脱ぎ掛けているモブ太を制止した。

「無理だよ！漏れちゃう！！」

美弥は、一瞬の内に考えた——。

『この密室でオシッコなんかされたら悪臭でもっとメンタルをやられてしまうわ…！ よしッ！こうなったら…！！！！』

「モブ太くんっ！！！」

「わぁ！出ちゃうううう！」

ズボンとパンツを膝まで下ろしたモブ太は、両手で隠さなくても片手で隠れてしまう小さなショタチンポを——。両手で覆って、美弥の言葉のままにオシッコを我慢していた。

「おねえさんのお口に、オシッコしていいよ！！！」

その言葉を発した瞬間、美弥は——。手に持っていた『戦隊ヘルメットに放尿させれば良かったんじゃない？』と、そんな考えを巡らせながら…モブ太のオシッコを口で受け止めた。

ジョオオオオオオオオおおおおおおおおおおおお……！！

「おねえさぁん～ オシッコ止まんないよぉ～」

「……………」

一度、口で受け止めてしまったものは、後には引くことが出来ず、美弥は——。モブ太が放尿するオシッコを口で受け止めつつ、口から溢れ落ちるオシッコを戦隊ヘルメットを反対にして、エレベーターの床に撒き散らさないようにした。

ジョオオオオオオオオおおおおおおおおおおおお……！！

「……………」

口を大きく開けたままの美弥は、モブ太のオシッコをヘルメットの中に誘導しようとしたものの——。『おねえさんのお口に、オシッコしていいよ』と言われたモブ太は、やはり子供で…それを察する事なく、美弥の口に目掛けて放尿を続けた。

ジョオオオオオオオオおおおおおおおおおおおお……！！

「……………」

自分の初動指示がいけなかったのだと観念した美弥は——。まるで公衆トイレの立ちション男子便器ごとく、微動だにしないまま動かなかった。そんな美弥は鼻で息をしていたのだが、時折、喉を鳴らせてモブ太のオシッコを飲んでしまっていた。

ジョオオオオオオオオおおおおおおおおおおおお……！！

「ふんう… ずうう… ふんう… すうう… ごきゅっ…！」

それにより、モブ太のオシッコに対して抵抗感を失っていた美弥は——。

『んぐう…！ 勢いが弱まってきた…！』

じょおおおおおおおおおおおお……！！

「ふうう… すうふう… ふうう… ごくっ…！」

美弥が気づいたオシッコの勢いは、見る見るその放物線を変化させていき——。美弥は、オシッコで波を打っている今にも溢れそうなヘルメットをひっくり返さないようにしながら、少量になってきたモブ太のオシッコを喉奥へダイレクトに入るよう受け止めていた。

『モブ太くん、ちゃんと私の口をねらって～』

「はああむ…っんう…」

「ふぎゅ！おねえさん……！？」

そして、美弥は、モブ太の小さなショタチンポを——。駄菓子屋で売っていきそうな「ポリエチレン詰め清涼飲料ジュース」を飲むかのように、咥え込んでチューチュー吸った。

「おねえさん… もお出ないよお…」

「うん、大丈夫そうね…♪」

モブ太の言葉と、口の中で——。美弥は、舌でショタチンポの先ちょを転がしながら、オシッコを止まった事を確認した。

「おねえさん、ごめんなさい…」

モブ太は脱いだ時とは違い、パンツを履いてから足首までズリ落ちていたズボンを履いていた、その姿は——。美弥に何度も頭を下げて謝っているように見えた。

「大丈夫だよ♪ こっち来て♪」

変身を解除する事で——。オシッコ入りの戦隊ヘルメットを変身ブレスレットに収納させた美弥は、戦隊支給の制服姿でモブ太に微笑んだ。

「おねえちゃんが守ってあげる♪」

『まだ最悪の事態でもないし… 仲間と通信ができるまで待ってみよ…!』

1時間後——。状況は、依然として変わっていなかった。

エレベーターの緊急連絡ボタンでの応答は一向になく、戦隊ブレスレットでの戦隊メンバーとの連絡も、通信が回復する兆しがない状況だった。

「なんだか暑くなってきたわね…」

美弥たちが閉じ込められたエレベーター内は、空調機能は活きているものの、温度調整機能に不具合があるようで——。暑さを感じて来た美弥は、戦隊制服の上着を脱いで、ノースリーブシャツ姿になった。

「モブ太くん、どうかした？」

体力の温存を促してモブ太を膝枕していた美弥は——。モブ太が息苦しそうにしているのに気が付いた。

「おねえさん… ボク…」

膝の上で美弥を見上げたモブ太は、やっとの思いで言葉を出すような声でささやいた。

「ノドが乾いて…」

『脱水症状!? 私とした事が気が回らなかったわ!』

美弥が自己反省をしながらも、『どうしよう?』と手をこまねいていると——。

美弥の頬から一雫の汗が、モブ太の口に流れ落ちた。

ゴク…

「おねえさん… 汗…」

モブ太は、そう囁くと——。美弥の首筋を流れる汗に吸い付いて来た。

「え？ …モブ太くん？」

「おねえさんの汗… おねえさんの汗…」

「あせ…！？」

モブ太は、虚な瞳で——。犬のように吐息と舌を出しながら、美弥の首筋を舐め回していた。

ぺろ… ぺろ… ぺろ… ぺろ… ぺろ… ぺろ…

「はあ… はあ… はあ… はあ… はあ… はあ…」

『モブ太くん、相当、喉が渴いてたのね…』

モブ太の行動を察した美弥は、モブ太を咎める事なく——。モブ太の体を支えるように抱きしめながら、首筋舐めを受け入れてあげた。

ぺろん… ぺろん… ぺろん… ぺろん… ぺろ… ぺろ… ぺろ… ぺろ…

「んふう…♥ …♥」

『ノドが乾いてるんだから、仕方ないよね… そ、そうだよね… 私の汗で、水

分補給できるんなら…』

ぺろん… ぺろん… ぺろん… ぺろん… ぺろ… ぺろ… ぺろ… ぺろ…

「んひゃ…♥ んう…♥」

『それにしても……』

単に汗を舐めているだけの行為だったのだが、美弥には——。それは、まるで恋人との性行為においての愛撫のようで、ショタに首筋キスをされているような思いを脳裏に浮かばせてしまい、美弥は邪推な自分を忌まわしめようとしながらも、女の吐息を漏らさないように口元を押さえた。

ぺろん… ぺろん… ぺろん… ぺろん… ぺろ… ぺろ… ぺろ… ぺろ…

「んうふ… んんう… んんう…♥」

【体験版】 おわり